

## 熱い戦い

暦の上では立秋を過ぎたというのに各地で35℃を超える異常な猛暑日が続いています。この暑い中、甲子園でも熱い戦いが繰り広げられております。私も元球児で昔から高校野球の大ファンですので夏の甲子園は毎年観戦に行きます。今年も15日の終戦記念日に参りました。この日は正午には戦没者への追悼のための黙禱が1分間のサイレンの音を合図に行われますが、310万人もの尊い国民の命が犠牲になった68年前のあの戦争はなんだったのか？その方々の犠牲があったから今の平和と繁栄が築かれたのだということを改めて感じさせられました。それに球児には平和な世の中であるがゆえに野球ができる幸せを感じてほしいとも思いました。

国民栄誉賞を今年の5月5日に長嶋元巨人軍監督と共に受賞した松井秀喜選手がテレビで高校野球について語っていました。松井選手といえば石川県の星稜高校時代の3年生の最後の夏の甲子園で「5打席連続敬遠」を受け、バットを一度も振らずに2:3で敗退したという伝説の持ち主です。実はあの21年前の1992年8月16日、夏の甲子園で私はネット裏中央特別自由席で観戦していました。

当日は5万5千人の大観衆で、ほとんどの観客は当時超高校級の怪物バッターとして話題にあがっていた松井選手のホームランを観たかったに違いないと思います。私もその一人でした。それが一度もバットを振ることなく歩かされ、極めつけは7回二死走者無しでも敬遠という徹底振りであえなく敗退し、試合の最中に星稜高校の応援席からはメガホンやゴミがグラウンドに投げ入れられ、さらに相手チームの校歌斉唱時にはネット裏からも「帰れ」「帰れ」の大合唱が起こり、甲子園とは思えぬ異常な状態であったことを鮮明に覚えています。その後「5打席連続敬遠」について賛否両論の論争が繰り広げられ、社会問題にまで発展しました。

以来松井選手はあの「5打席連続敬遠」についてあまり語ることは無かったのですが、現役を引退した今年長年の沈黙を破ってようやく重い口を開いたように思います。「5打席連続敬遠された打者だと証明しないと、という思いは持ち続けた。大きなエネルギーになった」、と感謝すらしているとも読めるコメントでした。その後プロ野球で読売巨人軍からニューヨーク・ヤンキースへとすすみ、日米通算本塁打507本、通算安打2,643本という輝かしい成績を残して国民栄誉賞まで受賞しました。松井選手の活躍の原動力があこの「5打席連続敬遠」だったのかもかもしれません。「敬遠されたことは過去に何度もあり、そのことに関しての悔しさはなかった。最後の夏だったのでもっと仲間たちと試合したかったので、負けた悔しさだけが残った」、とも語っています。

確かに敬遠された次の5番バッターが打っていれば勝てた場面もありました。もし勝っていればあれ程大きな騒ぎにはならなかったはずです。あの試合で松井選手のポジションはサード（プロ入り後は外野手）で、本人のエラーが失点につながった場面もあり、その悔しさもあるのではと思います。エラー後ベンチに戻る途中悔しそうにぼう然と空を見上げ、他の選手からポンポンと背中を叩かれている姿を観て、「あの怪物松井選手も普通の高校生だったんだなあ」、と思ったのを記憶しています。

松井選手は現役引退会見で20年間の一番の思い出はと聞かれて、「やっぱり長嶋監督とふたりで素振りをしていた時間ですかね」、と語っていました。長嶋さんは「素振りとは、ただの打撃技術を磨くだけではない。剣道の素振りと同じで、精神の鍛錬という側面を持つ修行のようなもの」、と後に語っています。こんなエピソードがあります。長嶋さんはメジャーに渡った松井選手に国際電話を使ってその場で素振りをさせ、受話器を通して聞こえる“音”でバッティングの状態をチェックしたとのこと。バッティングの状態を遠く離れていても“音”で感じられる程2人は強い絆で結ばれていたんだということを感じさせる美談だと思います。

いくつになっても高校野球をこよなく愛せるのは、元高校球児として自分が果たせなかった「甲子園出場」という夢を今でも心のどこかで追いつけているのではないかと思います。7月に行われた税理士会のソフトボール8支部対抗戦において我が天王寺支部は5年ぶりの優勝を果たしました。年甲斐もなく優勝の瞬間抱き合って喜び合い、「みんなで力を合わせて勝ち取った」という誇り、それが団体競技の魅力であります。私らの甲子園は来年も続きますよ！